

舊臘より讀書會とて月に一度、アンデルセンの著はせし小説『即興詩人』の森鷗外譯を讀む集りを始む。日本の文語文最後の光芒を放つ名譯と言はるる文章にて、讀む者の日本語感覺を豊かにするものと信ぜらる。この小説、ローマの母子家庭に育ちし男子の置かれし多彩なる境遇の中に、即興にて詩を作り聲に出して讀上ぐる即興詩人に成長しゆく経緯を描くものにて、一種の教養小説と言へむ。走馬燈のごとき人物の動きはさらなり、他にもアンデルセンが訪れし十九世紀ローマを中心に様々なる土地の自然や風俗もこまやかに描かれたれば、本書を讀みたる日本人の伊太利に遊ぶ者の多くが、今時の觀光案内宜しくこの鷗外譯の袖珍本を懐に旅を續けりと聞く。

「美小鬟、即興詩人」なる章に「國を去りての後も、テエエルの流のさまを思ふごととに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃げに見ゆるに、月の光はさしたり。碾穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黒き影を印して立てり」とありて、「粉碾車」なる語出づ。ルビとて「こひきぐるま」とあり、「鳴り響く」とあれば、こは小麦粉を挽く水車のことなるべし。羅馬の舊市内にも水車ありたるとは思ひもよらぬことなりし。小説が情景は、アンデルセンが十九世紀中頃、日本にて幕末頃に滞在せる羅馬市内に見立てられたるに相違なく、「ここは見覚えあるフオオラム・ロマアヌムなりき。常は牛市と呼ぶところなり。」とも書かれたるを見れば、古代に元老院などありしローマの政治中心フオオロマーノの、中世にはローマの滅びにつれて打ち捨てられ、放牧場になりたる面影を留めしものならむ。粉挽き水車の音がするも納得せらるゝところなり。

日本に引き當つれば、永田町界限にて放牧行はれ、水車にて米舂く様想像せられ、近年さかしら口に斯かる状況續かば日本は滅びむなどといふ論者のあれば、羅馬同様の滅びの姿はかかるものかとも想像せらる。思ひ返せば、即興詩人と同じ頃の江戸にも水車の廻るが有りたり。江戸の外とは言へ、澁谷あたりには水田ありて、葛飾北斎の『富嶽三十六景』の一景「穩田の水車」に見らるゝごとく、幾つもの水車勢ひよく廻りて米を搗きたりけり。今や若者達の全國より蝟集してただただ蠹きまはる雑炊のごとき原宿の竹下町邊の、明治の終はり近くまで稻作行はれ、多くの水車ありとは、隔世の感深きところなり。蝦や目高や小鮒の群の泳ぎある「春の小川」(文部省唱歌)も穩田村を流るゝ澁谷川あたりの情景を詠めりといふ。

アンデルセンに忘れ難き夕の景色に對し、余に忘れ難き水車の光景あり。時は終戦直前、所は小田原在の農村にて、幅狭き水路に水車廻りたり。テベレ河の幅廣く黄色きことかはり、清冽なる水の潺湲せんぜんと流れたり。空襲による焼け跡の、灰の舞ひ異臭漂ふ東京より逃れて、稻田のただ中に點在する農家の一軒に疎開せるなれば、その穩やかにして靜けき身の回りの様に、戦争のさなかにかかる平和なる生活もあり得るか、戸惑ひさへ感じたり。食料不足の世の中に、水車のぎいごとんとゆつたりとせる廻轉にて搗きたる米の旨かりしも忘れ得ぬことなり。その水車小屋にて藁打つこと教へられ、やはらかくなりし藁にて草鞋作ることとも覺えたり。或る日など、明日は鰻とらむと水車の水路に竹築仕掛け、みごと鰻のおかずがありつけたることもありき。夕方ともなれば續く限りの稻田の先は、蔭となりし箱根の外輪山、明星明神の山々にし

て、その上にわづかに顔を覗かせたる富士の赤く染りたるを引立てたり。アンデルセンの感慨以上に忘れ難き夕景なりし。

學生時代の或る夏、友人の霧積温泉に籠れることありき。滞在打上げの報に、碓井峠の下、横川よりの登りにて三時間以上かけ、海拔千メートルほどの旅館に至れり。明治には人力車などを利用して伊藤博文、勝海舟なども避暑に訪れたりといふにしては、山小屋に毛の生えたるごとき旅館一軒あるのみの鄙びたる山地なり。廣くはあれど熱くも冷くもなき温泉には、数少き宿泊客の集ひ、湯に洗面器を浮べて中にある料理を皆に勧む。鶏のごとき味ならむと差出され食したるは、先程捕へし青大將を旅館にて焼いてもらひしもの由なり。

夕方は薄暗き電燈ともりたり。電柱も電話線もなき孤立せる當時の霧積温泉なれば、宿前の小川に鐵棒渡し、それに小さき金屬製の水車とりつけ發電機を廻して得たる電氣なり。エネルギー問題、電力不足などかまびすしく論ぜられ、小さき水力發電機の利用もすすめらるる現在なれば、六十年ほど昔の霧積の光景が、ほの暖きものに感ぜらる。